

## 青木啓将著『現代日本刀の生成』書評に代えて 刀剣鑑賞と「刀の世界」ウチソト

南本有紀

Book Reviews: AOKI Hiroyuki, “Generation of Japanese Sword in Contemporary Japan”  
Or Study on Japanese Sword Appreciation and Appraisal Terms

MINAMIMOTO Yuki

### 要旨

青木啓将著『現代日本刀の生成』（言叢社、2019）刊行に合わせて開催されたシンポジウムにおける同書の地域研究における位置づけをまとめた発表を採録する。同書は、関市等で実施されたフィールドワークをもとに現代日本刀の諸相について記した民族誌であり、文化人類学における物質研究である。本稿では同書の内容を紹介し、同書が取り上げた現代日本における日本刀・現代刀匠に関する諸論点を挙げ、とくに刀剣鑑賞について考察した。

#### はじめに

日本人ならば誰もが日本刀を知っている。知っているだけでなく、あのすらりとした独特の形状を正確に思い浮かべ、多種多様な刃物の中から選り分けることができるに違いない。しかし、そのうちどれほどの人が「日本刀の美（見どころ）」を知っているかという心もとなくはないだろうか。仮に、刀と太刀を見分けたり、数振の脇指の差異を指摘したりすることができるだろうか。

日本人の最目なしで日本刀は美しいし、かっこよい。オンラインゲーム「刀剣乱舞-ONLINE-」（2015年1月14日配信スタート）の「刀剣男士」が大人気になる前から、日本刀は「イケメン」であった。しかし、昨今の刀剣ブーム以前には、日本刀は難解で、刀剣の世界は限られた人に秘匿された状況にあった。今もそうかもしれない。ここ数年来、博物館業界では空前の日本刀ブーム<sup>1</sup>で、通年ここかしこで刀剣展が開催され、鑑賞の機会が増えている。それでも、独特の刀剣鑑賞用語（後述する）を理解する人はまだまだ少数派だし、誰もがその美を分かち合っているわけではない。

この近くで遠い日本刀の世界をフィールドワークし、現代日本における刀剣生成の場を取り上げたユニークな民族誌を書き上げた文化人類学者がいた。急逝した彼と業績を偲ぶ催しが開催され、発表者のひとりとして参加する機会を得たので、その著書とシンポジウムのような報告し、併せて、知られざる日本刀鑑賞の世界を紹介したいと思う。

#### 1 『現代日本刀の生成』について

さて、本稿の端緒となった青木啓将『現代日本刀の生成 物証性をめぐる人類学的研究』（言叢社、2019年）は、著者が名古屋大学大学院に提出した学位請求論文「物質性をめぐる人類学研究 日本刀の事例における製作、意味の生成、社会関係を中心に」を書籍として出版したもので、目次は以下の通りである。

##### 序章

- 1章 日本刀事始め
- 2章 日本刀の受容の近現代史
- 3章 日本刀の生産と流通
- 4章 日本刀の鑑賞
- 5章 鑑賞美の規則
- 6章 実用性に対する認識と「科学」との出会い
- 7章 日本刀を想う
- 8章 日本刀を創る

##### 終章 結論と今後の課題

本書および元になった博士論文の内容と学術的意義については、本書あとがきで著者の指導教員のひとりであった佐々木重洋氏が要領よくまとめておられるので参照願いたい。ここで簡単にまとめておくと、本書は、現代日本社会における日本刀の製作と鑑賞の現場での参与観察をもとに日本刀の置かれた独特（著者はそれを「刀の世界」と呼んでいる）の位置／価値づけを考察した文化人類学における物質研究で、「刀の世界のウチとソト」の往還経験から人とモノの関係性の精緻な分析が試みられている。本書の探求は、後述するシンポジウムでは、アンドレ・ルロワ＝グーラン（1911-86）からアルフレ

ッド・ジェル (1945-97)、ティム・インゴルド (1948-) やダニエル・ミラー (1954-) 等の業績を参照しながらその深度と先進性を指摘された。

本書を撮要しておこう。本書は、岐阜県関市出身の文化人類学者である青木氏が関市を主なフィールドとして、製作と鑑賞から日本刀文化の生成について取り上げている。序章で日本刀と鍛冶の先行研究を要略し、併せて文化人類学における物質文化(とくに芸術)研究史を概観、続く第1～2章で日本刀の基礎知識から歴史、さらに受容史が約説される。第3章で現代刀の置かれた状況が述べられ、第4～5章で鑑賞、第6章で実用性と鑑賞美、その科学的アプローチ、第7章で神聖性が考察され、第8章で現代刀匠の新展開を取り上げ、終章で改めて日本刀を取り巻く独自の「刀の世界」を検討し、人とモノ(日本刀)の相互交渉について、物質性と感性の関係へと論点を昇華して締めくくっている。

序盤で、明治以降、現代までの日本刀史が総括され、とりわけ、軍刀生産や帝展(帝国美術院展覧会)出品を取り上げるユニークな視座は、美術としての日本刀として美術史<sup>2</sup>家にも参照されるべきだと感じた。その他、日本刀について考え得るさまざまな観点から熟思を重ねつつ、巻中、何度も繰り返されるのが、名刀とは、よい刀とは、という問いかけである。本書には、この正解のない問いに対して著書がフィールドで出会った区々の回答が随所で提示され、とりどりの刀剣観が印象的であった。

一読者としての素朴な感想をいうなら、法規的な制約<sup>3</sup>からフィールドワークが不十分ならざるを得ない日本刀製作よりも、鑑賞に関する論述こそ本書の白眉だろう。学芸員として刀剣展を担当する日本刀初学者である筆者が、日頃、直面する「刀の世界」の難しさが生き生きとしたフィールドノートに活写されていて感に堪えない。同時に、斯界の神秘的なまでの近寄りたさを再認識した。仄聞するに、著者に代わって編集校正に当たった文化人類学者は未知なる用語と概念の氾濫に苦労したとか。私見だが、刀剣鑑賞の難解さは独特の鑑賞用語に多くを由来するし、そもそも刀剣愛好の仕方(例えば、鑑賞/鑑定)は「部外者」には窺い知る機会がない。入札鑑定会に参加したことがない読者が、本書の記述だけで著者の意図を充分理解できたか、老婆心ながら心配になった。

日本刀見巧者によれば、よい刀は誰が見てもよく、その差は歴然としているという。確かに、誰もが認める名刀は存在し、よいとされている刀剣の評価が二転三転することはない。けれども、本書の潜考にもかかわらず、名刀を説明する簡単明瞭な言葉が見つからなかったのも事実である。

以上を受けて、本稿では、本書の行き届いた考察に屋上屋を架す愚を恐れながらも、本書の紹介を兼ねて、刀剣鑑賞について省察する。

## 2 公開シンポジウム「現代日本刀の生成」について

本稿は、青木氏著作に関するシンポジウムにおける筆者の紙上発表である。当該シンポジウムは中部地区研究懇談会(中部人類学談話会)第251回例会として企画され、遺著がなる過程での関係者(インフォーマント等)を招聘し、本書の内容と学術的価値を振り返る一方、関市における日本刀の歴史と文化について理解を深める目的で開催された<sup>4</sup>。プログラム<sup>5</sup>は以下の通りである。

開会挨拶・趣旨説明(佐々木重洋・名古屋大学)

関の日本刀文化(関市・DVD視聴)

刀都・関について(関伝日本刀鍛錬技術保存会<sup>6</sup>、江西奈央美・関市観光課)

地域研究からみた『現代日本刀の生成』(※本稿3)

物質性と人類学研究1(後藤明・南山大学)

物質性と人類学研究2(大村敬一・放送大学)

コメント(赤松伸咲・刀匠)

閉会挨拶(青木栄兒)

次節に筆者発表を摘録する。

## 3 地域研究からみた『現代日本刀の生成』: 刀剣鑑賞と「刀の世界」ウチソト

### ①地域における『現代日本刀の生成』の受容: 公共図書館の利用状況

本論に入る前に、本書に関する岐阜県内の公共図書館の動向を見ておこう。2019年11月現在、県内では5館(岐阜県、岐阜市、大垣市、高山市、関市)に架蔵があり、うち3館は郷土資料として禁帯出のため具体的な利用状況が不明であったが、貸出可の高山市図書館では2019年7月に1冊を受け入れ、11月18日現在、貸出4回、同じく関市立図書館では5月に10冊<sup>7</sup>を受け入れ、計10回貸出されている。著者の出身地であり、フィールドとなった関市での一般の関心が高いことがわかる。

### ② 関と日本刀

関市は岐阜県美濃地方(県南部)の中央部分、平成27年(2015)国勢調査<sup>8</sup>によれば人口重心がある、文字通り日本の真ん中に位置する、人口88,266人(2020年1月現在)<sup>9</sup>、面積472.33km<sup>2</sup>の地方都市である。全国約790市町村の中で、人口なら上位4割、面積でいうなら上位2割にランクする<sup>10</sup>。広い面積のほとんどを山林が占める(森林率80.9%)中山間地域だが、3S<sup>11</sup>の一角を成す世界的な刃物産地<sup>12</sup>でもある。地場産業である刃物生産では包丁やカスタムナイフ、理髪用鋏、爪切り等の評価

が高い。

関の刃物製造<sup>13</sup>は中世に遡り、当時は剃刀などの打刃物で知られていたようである。美濃における作刀は西濃（西美濃）から始まり、関には南北朝頃に大和の刀鍛冶の技術が流入して、日明貿易（主要な交易品は東刀と呼ばれる数打ちの日本刀であった）の時代には中国地方と双璧を成す産地を形成した。この室町末期が関鍛冶の最盛期で300人を超す刀鍛冶がいたとされる。その後、関ヶ原合戦を経て、全国へ領地を広げた中部地方の武将が地元・関の刀工を伴ったことにより、江戸時代を通じて、美濃の刀鍛冶は全国に多大な影響を及ぼした。近世、各地に拡散した美濃（関）鍛冶は、明治期の日本刀鍛錬所および日本刀鍛錬塾を経て、再び関に作刀拠点、即ち、軍刀の量産基地をなして隆盛を極めた。昭和十年代、「刀都・関」と呼ばれた時期には、関に250人以上<sup>14</sup>もの刀工がいたのである。

終戦を経て人数は激減してしまったが、2016年に関市周辺で作刀する刀匠は関伝日本刀鍛錬技術保存会会員14人、元会員3人の計17人（うち全日本刀匠会東海支部所属12人）の刀匠<sup>15</sup>がいて、全日本刀匠会会員211人<sup>16</sup>に占める割合は8%、この数字は赤羽刀<sup>17</sup>に占める美濃刀の数値と等しい<sup>18</sup>。2019年11月現在の全日本刀匠会会員で見ると、最も多いのが岡山県18人で、次いで埼玉、福岡、東京と続き、岐阜は5位となっている。

### ③ 日本刀とは

日本刀の鑑賞について取り上げるに当たり、基本事項を確認しておく。まず、現代日本における日本刀は「武器」ではなく「美術工芸品」である。実用性は有する（実際に切れる）が、実戦に用いることは禁止されている。美術品として所有するに際しても、登録審査を経た登録が義務づけられている。合格するには、伝統的な原料（玉鋼）と製法（折り返し鍛錬）、形状でなければならない。つまり、日本刀とは伝統的な原料と製法による湾刀<sup>19</sup>である。鍛錬することで表面に独特の肌合いが生まれ、焼き入れによって特有の刃文が生じる。鏑のある片刃が通例だが、それ以外の体状もあり、長さ（刃長）から太刀・刀、脇指、短刀に分けられる。

日本刀の鑑賞では、製作時期によって古刀（～関ヶ原合戦）・新刀（～江戸中期・明和年間）・新々刀（～幕末明治）に大別される。古刀は五箇伝（大和・山城・備前・相州・美濃）、新刀は七ヶ国（京・大坂・武蔵・尾張・越前・肥前・薩摩）が主な産地／作風である。

具体的にみていこう。写真1の2振は典型的な日本刀の形姿をしていて、一見して判別不能のようだが、子細に観察すれば、長さや反り具合、地鉄の色合い、刃文等が異なる。これは、作者と時代の違いが作風・形態の差

異となっているためである。

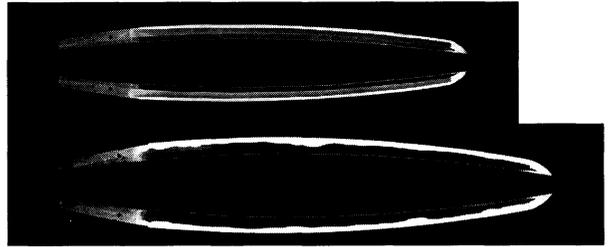


写真1 上：小太刀 銘 濃州関住人兼定 享徳三年二月日（岐阜県博物館蔵・中村慧撮像）、下：刀 銘 和泉守兼定<sup>20</sup> 作（関信用金庫蔵・中村慧撮像）

日本刀の鑑賞はこのような細かな部分の検討を積み重ねて行われる。ここまででも少なからぬ特殊用語が出てきたが、日本刀の鑑賞方法と鑑賞／鑑定用語は更に独特なものである。

### ④ 日本刀の鑑賞

日本刀鑑賞のひとつに入札鑑定がある。銘がある茎<sup>21</sup>を隠した状態で刀身を鑑賞し、作風から刀工を当てる遊戯性を加味した勉強法として江戸時代から行われている。

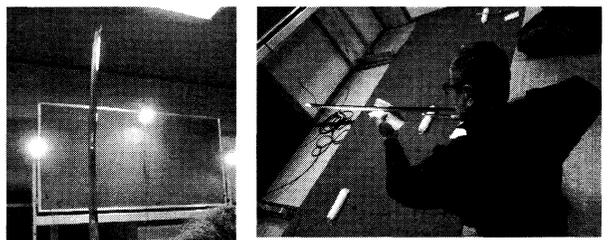


写真2 入札鑑定のようす  
左：体配（姿）を見る  
右：地鉄と刃文を見る

鑑定は次の手順で行われる。第一に、体配（姿）を見ることで時代を、第二に、地鉄（肌）を見て産地を、第三に、刃文を見て作者を判断する。前述のように製作年代が推定できれば、時代ごとの代表的な産地があるため、製作した刀工の見当がつく。このように段階的な指標によって該当する作風を特定していくことで刀工を確定するのである。

入札鑑定は、実物を手に取って行われるほか、刀剣専門誌の紙上入札もある。茎の銘を隠した押形（刀剣の拓本様の絵図）と次のような作風についての記述が示され、刀工を答えさせるものである。例を挙げれば、「刃長2尺3寸1分、反り7分強。鏑造、庵棟、身幅普通、重ね薄め、先反りやや高く、中切先。板目肌流れ（下線は筆者。以下同。）ごころに地沸つき、白気映りあり。刃文は互の目に丁子、耳形の刃が交じり、匂出来、小足入り、砂流しかかり、表裏の刃が揃い気味。帽子は乱れ込み、先小丸でわずかに返る。茎は生ぶ、先刃上がり栗尻、鍔

目は鷹の羽、指表棟寄りに5字銘。」という具合に出題される<sup>22</sup>。

さて、この問題と古刀・五箇伝のうち美濃伝の作風(板目に柃ごころの交じるものが多く、白気ごころの映りが出る。刃文は直刃に互の目乱れが加わり、互の目の頭が尖り、直刃にも1ヶ所か2ヶ所に尖りごころの小互の目が交じる。匂出来のものが多く、三本杉、大湾れ乱れ、皆焼もある。帽は返りが刃先に寄って深い地藏帽子や善定帽子になる<sup>23</sup>。)を照らし合わせると、同じ表現(下線部=鑑賞/鑑定用語)を見つけることができ、出題は美濃伝であると判断できるのである。(その他の情報からも総合的に考量して回答は「和泉守兼定」となる。)

こうした実物と典型的とされる作風の比較による鑑定は、実のところ「掟七割」といい、例外を経験でカバーする必要があるのだが、嘘のようによく当たる(乏しい経験ながら、筆者の実感では)。見巧者といわれる人たちは、実際の作例(日本刀の状態)と鑑賞用語を関連づけて会得した上で、刀剣を鑑賞/鑑定しているのだと思われる。「掟七割」という言葉を教えてくださったI氏によれば、「頭の中に(これらの見どころ=鑑賞用語を分類収納した)箱(抽斗)をいくつも作っておいて」鑑定に臨むといい、知識が多次元軸の脳内空間のデータベースに格納されている様が想像される。然様に鑑定虎の巻のごとく平面(二次元)の図表に収まり切れない複雑な知識体系なのである。従って青木氏著作でも異なる指標軸の複数の表で用語が整理分類されることになる。「刀の世界」の難しさの一端なりとも伝わっただろうか。

##### ⑤ よい刀とは：地域研究における学術的価値

前々節で、現代日本刀は美術品であると述べた。材料・製法・形状の伝統性(真正性)をいわば強制され、一定の水準に達していなければ登録されないことも記した。そのためには、日本刀のよしあしを図る蓋然性の高い基準があり、それは多くの人々が納得できる規範であるべきだが、その鑑賞美を体得した人は稀であることは前節で略述した。青木氏が例示したところでは、日本刀の帝展出品は第15回(1934)のみ、以降は工芸部門から排斥されたのは、精通した帝展審査員がいなかったからだ。

また、美術品である前に実用品(刃物)である日本刀の作り手(刀匠)は、殆どの人が切れ味にこだわって製作している。鑑賞美とともに、青木氏の重要な関心事である現代日本刀の実用性と創造性について触れつつ、本書の地域研究・学術的価値を強調したい。

最初に、岐阜県あるいは関市において刀剣研究が盛んであることは自明である。とくに関市では関伝日本刀鍛錬技術保存会を中心に資料の発掘や先人の顕彰が地道に続けられており、関市史に「刃物産業編」というユニー

クな巻を有するように、郷土史または産業史の分野では多くの業績<sup>24</sup>がある。翻って、美術刀剣という観点では、五箇伝の一翼を担う美濃刀について、さまざまな専門書が刊行<sup>25</sup>されてきた。これらは刀工研究、作品集に分類されるものである。つまり、先行研究は、いずれも生産者・発信者の目線に立ったものであったといえるだろう。

一方、本書は以上の先行研究が取りこぼしてきた受容者側の「鑑賞」を大きなテーマとし、論点にすらすらとこなかった現代刀匠の「創造」にも切り込んだ前人未踏の書である。俯瞰すれば、明治以降の「美術」制度の枠組みを窺う論点も含んでいる。

現代日本刀にとって「よい刀」の基準を知るために、日本美術刀剣保存協会のコンクール「現代刀職展(旧・新作名刀展)」における岐阜県内刀匠の受賞状況(表1 新作名刀展/現代刀職展(日本美術刀剣保存協会)受賞一覧)を見てみよう。1995~2008年の期間に各賞表彰が相次いでいる。特筆すべきは尾川邦彦刀匠(兼園1925-2012)・光敏刀匠(兼園1953-)父子の無鑑査認定(兼園2006、兼園2009)である。無鑑査は、刀剣界では、国重要無形文化財保持者各個認定(人間国宝)の次に位置づけられる名工とされるポジションだ。両刀匠の技術と作品の鑑賞美が広く認められた証といってよい。但し、尾川刀匠の作風は二人とも美濃伝ではない。華麗な濤乱刃で名高い大坂新刀の津田越前守助広に倣っている。これには、美濃伝狙い(模倣)では、実は、受賞が難しいという事情がある。他の高位受賞者も、相州伝や備前伝を目標としている<sup>26</sup>のが実態である。

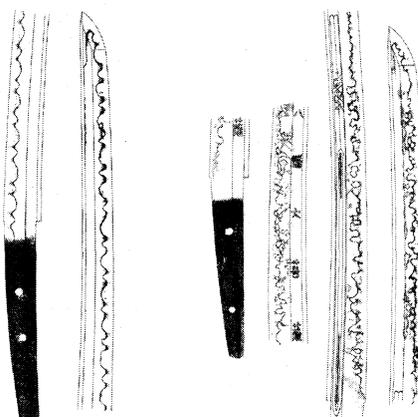


写真3 押形(個人蔵・紙谷治宏押形作成)  
左：脇指 銘 濃州赤坂住千手院作  
右：刀 銘 兼則作

一例を挙げよう。写真3を見比べると、質実(左)と絢爛(右)という作風の違いが一目瞭然とされるだろう。大量生産の実用品(例えば、日明貿易の束刀)という産地の歴史的経緯から、美濃刀が見た目重視の美術刀剣としてアピールしにくいことは残念ながら否定できない。

しかし、もちろん、美濃刀にも古来「よい刀」とされる名刀はあるし、美濃刀に倣って評価の高い現代刀もある。

ところで、「美術刀剣類」には法的定義がある。即ち、銃砲刀剣類所持等取締法に「美術品として価値ある刀剣類」を登録する（第14条）とし、登録規則（鑑定基準）に「姿、鍛え、刃文、彫り物等に美しさが認められ、又は各派の伝統的特色が明らかに示されているもの」がそれである。結局、現代刀であっても、鑑賞／鑑定用語で語られる作風を有し、従来通りの形状・刃文でなければ登録できない。現代刀匠は、原料・製法や製作本数の制約に加え、創造性をも制限されているのが現状なのである。

### おわりに

本稿は青木氏の示した刀剣研究の今後について展望して終りたいと思う。

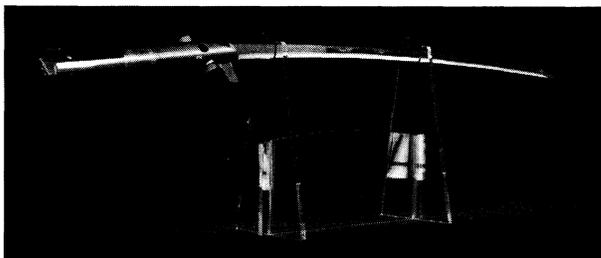


写真4 来入勢刃（ライトセイバー）  
二十五代・二十六代藤原兼房共作（関鍛冶伝承館蔵・関市写真提供）

写真4は、映画「スター・ウォーズ」に触発されて現代刀匠が製作した「日本刀」である。近年、アニメやゲームなど、若者文化と日本刀のコラボ企画が盛んに行われ、先駆館として知られる備前長船刀剣博物館の一連の事業（2011「戦国BASARA」HERO武器・武具列伝、2012エヴァンゲリオンと日本刀展、2013二次元VS日本刀展、2014戦国無双の刀剣展、2015真剣少女の日本刀展）の中でも、「エヴァンゲリオンと日本刀展」は、2012～2019年に全国24館を巡回<sup>27</sup>するヒットとなっている。企画者のひとりであった植野哲也氏によれば、エヴァ展出品作の中には「伝統的ではない」ため登録不合格となりかけたものもあったという。室町時代の長柄武器に類例（筑紫薙刀）を探して、からくも登録できた<sup>28</sup>と聞く。この作品については本書でも言及があり、刀匠が登録を念頭に作刀したという証言が記録されている。とはいえ、必ずしも伝統に拘泥しない審査に道を開く見逃せない変化であった。2015年以降のサブカルチャー発祥の日本刀ブームを追い風に、現代刀匠の創造力が発揮される機会が増えれば、硬直的な鑑賞美観の変容もあり得るのではないだろうか。

青木氏が苦心惨憺した鑑賞／鑑定については、先述し

た脳内データベースを実現するシソーラス構築の試み<sup>29</sup>が見られる。出品する刀匠に注目した本書の立場を転じれば、昨今、急増した博物館・美術館における刀剣展について、従来型の展示メソッドでは対応できない日本刀展示を考察する論考<sup>30</sup>も散見される。『現代日本刀の生成』が切り開いた諸論点について、漸く世間が追いついてきたように感じる。本書の撒いた種が芽吹き、確かな実りがもたらされるかは残された我々にかかっている。

本稿執筆にあたりシンポジウム主催・登壇者の皆様、刀剣勉強会の皆様にはたいへんお世話になりました。末尾ながら記して深謝申し上げます。

<sup>1</sup> 足利市立美術館「今、超克のとき。山姥切国広 いざ、足利。」（2018年3月4日～4月4日）は山姥切国広を出品して37,820人が来場（2018年視察資料より）。徳川美術館では鯨尾藤四郎を所蔵品展示に出品して、2015年度の来館者数が2013年度の来館18万人から25万人に急増した（平成29年度岐阜県博物館協会 第93回研修会「広報戦略を考える 自館の強みを見直す 徳川美術館の事例を中心に」における発表より）。

<sup>2</sup> 近代日本における「美術」制度導入については、佐藤道信『＜日本美術＞誕生』（講談社 1996）、佐藤道信『明治国家と近代美術』（吉川弘文館 北澤憲明『眼の神殿』（ブリュッケ 2010）、北澤憲明他『美術の日本近代史』（東京美術 2014）などを参照。

<sup>3</sup> 日本刀は「刀匠」しか製作できない。「刀匠」とするには、「刀匠」資格を有する刀鍛冶の下で5年以上の修業をし、文化庁の「美術刀剣刀匠技術保存研修会」を修了しなければならない。なおかつ、事前承認制により年間の作刀本数が制限されている。

<sup>4</sup> 広報チラシより。シンポジウムの概要は次の通り。タイトル：公開シンポジウム「現代日本刀の生成一刀都・関の刀の世界」、主催：青木啓将さんの博論出版を期する会／名古屋大学人文学研究科・文学部文化人類学研究室、共催：中部地区研究懇談会（中部人類学談話会）、日時：2019年11月30日（土）13:30～17:00、会場：名古屋大学文系総合館・カンファレンスホール

<sup>5</sup> 時間の都合で、予定されていた質疑応答・総合討論（佐々木重洋、余語琢磨・早稲田大学）は省略された。

<sup>6</sup> 井戸誠嗣、土岐邦彦、尾川光敏（刀匠名：兼國）、丹羽清吾（刀匠名：兼信）、奥田光雄

<sup>7</sup> 2020年1月19日現在、12冊の蔵書があり、うち1冊が貸出中。

<sup>8</sup> 総務省統計局ホームページより。

<https://www.stat.go.jp/data/kokusei/topics/topi102.html>

(2020年1月19日閲覧)

<sup>9</sup> 関市ホームページより。

<http://www.city.seki.lg.jp/0000004799.html> (2020年1月19日閲覧)

<sup>10</sup> Wikipedia「日本の市の人口順位」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%B8%82%E3%81%AE%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E9%A0%86%E4%BD%8D> (2020年1月19日閲覧)

「日本の市の面積一覧」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%97%A5%E6%9C%AC%E3%81%AE%E5%B8%82%E3%81%AE%E9%9D%A2%E7%A9%8D%E4%B8%80%E8%A6%A7> (2020年1月19日閲覧)

<sup>11</sup> スリーエス。いずれも世界的刃物産地であるイギリスのシェフィールド、ドイツのゾーリングと関市を指す。

<sup>12</sup> 関市産業経済部商工課・関市市長公室行政情報課『平成30年度 関市の工業』によれば、出荷額に占める岐阜県(関市)の全国シェアは以下の通りでいずれも全国一位。包丁；55.4% (47.1%)、ナイフ類；59.6% (46.7%)、鋏(理髪用除く)；30.7% (29.0%)、理髪用刃物；83.0% (72.3%)、その他利器工器具＝爪切り等；62.4% (51.0%)

<sup>13</sup> 以下、関市の刃物産業についての記述は、関市教育委員会『新修関市史 刃物産業編』(関市、1999)による。

<sup>14</sup> 昭和19年(1944)関刃物工業組合に届出のあった刀工は233人、未登録を含めると265人。関鍛冶伝承館「企画展 近現代刀匠列伝 廃刀令以降の刀匠たち」パンフレット(2004)、岐阜県博物館『伝統と創造 岐阜県重要無形文化財のわざと美』図録(2016)を参照。

<sup>15</sup> 『伝統と創造 岐阜県重要無形文化財のわざと美』(岐阜県博物館2016)より。なお、井戸誠嗣氏によると、2020年1月現在の関伝日本刀鍛錬技術保存会会員の刀匠は10人(元会員4人)である。

<sup>16</sup> ( )内にある通り、未所属の刀匠も相当数いるが、文化庁認定の刀匠の総数は公開されていないため便宜的に用いる。また、2020年現在、全日本刀匠会180人中、県内9人(関4人、富加3人、山県1人、羽島1人)が所属、全体に占める割合は約5%に減。

<sup>17</sup> 第二次世界大戦後、GHQによって武器として接收され、平成11年(1999)、日本国に返還された所有者不明の日本刀。全国の公立博物館等に譲渡された。

<sup>18</sup> 岡山県立博物館『日本刀 赤羽刀と備前の名刀』(同館2008)

<sup>19</sup> 他に、反りのない直刀、両刃の剣、槍・薙刀、鋏等もある。

<sup>20</sup> 「定」異体字

<sup>21</sup> 茎には銘のほか形態(茎仕立て、茎尻)、鑢目など、作者を特定する多くの情報がある。

<sup>22</sup> 『刀剣春秋』785号(2017年11月)「刀剣鑑定教室」より、適宜表記を改めた。回答は786号(12月)に掲載。

<sup>23</sup> 得能一男『刀剣見どころ勘どころ』(光芸出版1976)より、適宜省略して引いた。

<sup>24</sup> 井戸誠嗣監修『関伝日本刀鍛錬技術保存会45周年記念誌』(関伝日本刀鍛錬技術保存会2016)、『伸びゆくまち関市(副読本)』(関市教育委員会2015)、『新修関市史刃物産業編』(関市教育委員会1999)、関鍛冶刀祖調査会『関鍛冶の起源をさぐる』(関市1995)、『美濃伝(関伝)日本刀鍛錬』(関市[1988])、日本輸出刃物工業組合『関の刃物の歴史』(日本輸出刃物工業組合1984)、山田英『日本刀関七流』(中央刀剣会1970)、中島光洋『濃州関の日本刀』([岐阜県師範学校]1941)、篠原一郎『濃州関伝』(濃州日本刀鍛錬所1939)、小石修一『日本刀と本校の教育』(武儀郡関東尋常小学校1935)

<sup>25</sup> 『兼定と兼元：戦国時代の美濃刀』(兼定と兼元実行委員会・岐阜市歴史博物館2008)、杉浦良幸『美濃刀工銘鑑』(里文出版2008)、鈴木卓夫『室町期美濃刀工の研究』(里文出版2006)、『関伝美濃伝名刀展 関伝現代刀剣展』(関市1990)、『大和・美濃刀工展：日本名刀展シリーズ』(致道博物館1978)、加納友道『美濃刀押形集』(日本春霞刀剣会岐阜県支部1977)、得能一男『美濃刀大鑑』(刀剣研究連合会・大塚巧芸社1975)、『美濃刀匠銘鑑』(日本美術刀剣保存協会岐阜県支部1964)

<sup>26</sup> 『伝統と創造 岐阜県重要無形文化財のわざと美』(岐阜県博物館2016)

<sup>27</sup> Wikipedia「エヴァンゲリオンと日本刀展」

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B1%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%B3%E3%82%B2%E3%83%AA%E3%83%B2%E3%83%B3%E3%81%A8%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%88%80%E5%B1%95> (2020年1月23日閲覧)

<sup>28</sup> 『芸術新潮』66巻9号(2015年9月)。また、2018年3月11日、岐阜県博物館での博物館学芸講座「備前伝と美濃伝 日本刀五ヶ伝について」(講師：植野哲也)における講話でも言及があった。

<sup>29</sup> 福田博同「日本刀鑑定用語：どうコミュニケーションしてきたか」(『コミュニケーション文化』11号、2017年3月)

<sup>30</sup> 久保恭子「刀剣博物館LED照明導入への軌跡」(『照明学会誌』101巻12号、2017年12月)、井本悠紀「日本刀展示に於けるLED照明の問題点について」(『國學院雑誌』115巻8号、2014年8月)、大竹弘高「日本刀展示の研究(序論)：現状と課題」(『國學院大學博物館學紀要』33号、2008)

表1 新作名刀展／現代刀職展（日本美術刀剣保存協会）受賞一覧

※2018～現代刀職展に名称変更

作刀の部：太刀・刀・脇指・薙刀・槍の部

短刀・剣の部

年	回	無鑑査	高松宮賞	文化庁長官賞	日本美術刀剣保存協会名譽会長賞	日本美術刀剣保存協会会長賞	蕪山賞	寒山賞	全日本刀匠会会長賞	全日本刀匠会理事長賞	優秀賞	努力賞	入選	入選（入賞）
令和1 2019	55	尾川光敏										加藤賢津雄、 吉田政也		高羽弘宗・ 岡本克博（努力賞）
平成30 2018	54						加藤賢津雄						岡本克博、高羽弘、吉田政也	
平成29 2017	53	尾川光敏											吉田政也	高羽博（努力賞）、 岡本克博
平成28 2016	52	尾川光敏										加藤賢津雄、 加藤正文美	伊佐地督、小島郁夫、高羽弘、 丹羽清吾、吉田政也	
平成27 2015	51	尾川光敏											岡本克博、吉田政也	岡本克博、高羽弘
平成26 2014	50											高羽弘	岡本克博	
平成25 2013	49	尾川光敏											高羽弘	
平成24 2012	48	尾川邦彦、 尾川光敏												
平成23 2011	47	尾川邦彦、 尾川光敏										高羽弘		
平成22 2010	46	尾川邦彦、 尾川光敏											伊佐地督	
平成21 2009	45	尾川邦彦									尾川光敏		高羽弘、岡本克博、伊佐地督	吉田研
平成20 2008	44	尾川邦彦										高羽弘	小島郁夫、加藤正文美、吉田研、 伊佐地督、吉田政也	
平成19 2007	43	尾川邦彦						尾川光敏				加藤賢津雄、 高羽弘、加藤正文美	加藤孝雄、小島郁夫、浅野太郎、 伊佐地督、吉田研、丹羽清吾、吉田政也	加藤賢津雄、吉田政也
平成18 2006	42	尾川邦彦									加藤孝雄、 尾川光敏、小島郁夫	加藤賢津雄、高羽弘、吉田研、 伊佐地督、岡本克博		丹羽清吾
平成17 2005	41				尾川光敏	加藤賢津雄	尾川邦彦				高羽弘	加藤孝雄	小島郁夫、浅野太郎、伊佐地督	吉田研、丹羽清吾、 亀井昭平
平成16 2004	40	尾川光敏				尾川邦彦					加藤孝雄	加藤賢津雄		
平成15 2003	39				尾川邦彦	尾川光敏					加藤孝雄	高羽弘、加藤賢津雄、 小島郁夫	吉田研、亀井昭平	
平成14 2002	38			尾川光敏		尾川邦彦					加藤孝雄	加藤賢津雄、 高羽弘	小島郁夫、亀井昭平、伊佐地督、 吉田研	加藤賢津雄、高羽弘、 吉田研
平成13 2001	37					尾川邦彦					高羽弘、小島郁夫	加藤孝雄	尾川光敏、加藤賢津雄、亀井昭平、 伊佐地督、吉田研	加藤孝雄（努力賞）、 高羽弘、吉田研
平成12 2000	36										尾川邦彦、 尾川光敏、 高羽弘、加藤孝雄	小島郁夫	亀井昭平、加藤賢津雄、吉田研、 下島宙、丹羽清吾、伊佐地督	
平成11 1999	35				尾川邦彦	尾川光敏				高羽弘	加藤賢津雄	小島郁夫	加藤孝雄、亀井昭平、吉田研、 伊佐地督	吉田研、亀井昭平、 加藤孝雄
平成10 1998	34					尾川邦彦					尾川光敏	加藤賢津雄、 加藤孝雄	小島郁夫、高羽弘、吉田研、 亀井昭平、伊佐地督	丹羽清吾、吉田研、 高羽弘
平成9 1997	33	尾川邦彦	尾川光敏									加藤賢津雄	亀井昭平、高羽弘、小島郁夫、 加藤孝雄、伊佐地督、丹羽清吾	亀井昭平、吉田研
平成8 1996	32										尾川光敏、 尾川邦彦		加藤賢津雄、小島郁夫、加藤孝雄、 小島寛二、吉田研、伊佐地督、 高羽弘、後藤良三、亀井昭平、丹羽清吾	亀井昭平
平成7 1995	31										尾川光敏	尾川邦彦	小島郁夫、加藤孝雄、加藤賢津雄、 高羽弘、伊佐地督、後藤良三、 吉田研、丹羽清吾、小島寛二、亀井昭平	吉田研
平成6 1994	30											尾川光敏	加藤孝雄、小島郁夫、加藤賢津雄、 亀井昭平、尾川邦彦、高羽弘、 後藤良三、伊佐地督、松原龍平、 小島寛二、中田勝郎、吉田研	吉田研
平成5 1993	29											加藤孝雄、 小島郁夫	尾川邦彦、尾川光敏、加藤賢津雄、 後藤良三、高羽弘、亀井昭平、 吉田研、松原龍平、丹羽清吾、 小島寛二、中田勝郎	
平成4 1992	28											加藤賢津雄	小島郁夫、尾川邦彦、加藤孝雄、 尾川光敏、高羽弘、後藤良三、 亀井昭平、小島寛二、伊佐地督、 吉田研、丹羽清吾	
平成3 1991	27											加藤孝雄	高羽弘、尾川邦彦、亀井昭平、 丹羽清吾、伊佐地督、松原龍平、 吉田研、後藤良三、中田勝郎	
平成2 1990	26											加藤孝雄	加藤賢津雄、尾川邦彦、小島寛二、 亀井昭平、松原龍平、中田勝郎、 高羽弘、伊佐地督、丹羽清吾、吉田研	
平成1 1989	25												加藤孝雄、亀井昭平、小島寛二、 加藤賢津雄、小島郁夫、尾川邦彦、 高羽弘、後藤良三、松原龍平、 吉田研、大野正巳、丹羽清吾、伊佐地督	

以下より作成

全日本刀匠会 HP 新作刀展覧会受賞履歴 <http://www.tousyukai.jp/rireki/>

日本美術刀剣保存協会「刀剣美術」